

**鋼橋技術研究会**  
**施 工 部 会**  
**報 告 書 Ⅲ**

**[すみ肉溶接脚長に関する研究]**

**平成10年12月**

## 第1章 まえがき

鋼橋においては、従来50mm以下の板厚が使用されていたが、工数の縮減を目的とした少数主桁や板継ぎ省略が行われて厚板が使用されるようになったため、平成8年度の道路橋示方書の改訂において板厚の使用範囲が100mmまで広がった。

これにともない、主要部材の応力を伝えるすみ肉溶接のサイズ(S)は、厚い方の母材の板厚(t)に対して $S \geq \sqrt{2t}$ と言う規定が、板厚100mmまで適用されることとなった。

しかしながらこの規定は、リベット接合が主体であった昭和32年当時の道路橋示方書から見直しがされていないこと、また当時に比べて鋼材や溶材の品質が進歩していることなどから、見直しの必要性が高まってきている。

また、板厚の厚い範囲においてすみ肉脚長を小さくすることができれば、施工上のメリットが大きく期待できる。

このためすみ肉脚長WGではこの観点に立ち、 $S \geq \sqrt{2t}$ という規定が定められた根拠を、昔の文献等にさかのぼって調査すると同時に、今までに発表されている論文や研究報告をもとに、板厚100mmまで適用されている道路橋示方書の規定が妥当であるかを検証する。